



リスク研究センター報 CRR

October 2004 No. 1 創刊号

リスク研究センター設立の経緯

滋賀大学副学長

北村 裕明

リスク研究センターは、滋賀大学経済学部創立80周年記念と、大学院博士後期課程経済経営リスク専攻発足という二つの要素をふまえて、設立に至りました。

私たちは、大学院博士後期課程経済経営リスク専攻の準備の過程で、欧米のビジネススクールでリスクにシフトした講義が展開され始めたのが、1990年代末以降であることについては理解しておりました。そして、経済経営リスク専攻の構想が文部科学省の概算要求書に載り、大学設置審議会でも認められるようになった2002年秋口より、リスク研究センターの構想を練り始めました。すなわち、経済経営リスク専攻が社会科学系では日本で最初のリスクに関する本格的な教育機関となりますが、それを研究面で支える組織が必要であるという認識から出発したのでした。そして経済学部創立80周年の記念事業としても、こうした企画を中心においていただければ、滋賀大学経済学部の大きな飛躍となるだけでなく、日本の社会にも貢献が出来るであろうと考えた次第です。

2002年9月末の教授会で、リスク研究センター構想委員会を立ち上げることを決め、創立80周年記念事業企画委員会に諮ったのでした。最初の構想では、リスク研究の推進と成果の公表、リスク教育システムの開発、リスク研究教育の普及の3つをセンターの主たる機能とかけました。

2002年の11月末の80周年記念事業実行委員会で、リスク

研究センター設立のための企業募金を行うことを決定していただき、大学側と同窓会である陵水会との共同での募金活動を、2003年2月より開始いたしました。100社を超える企業と多くの個人から、総額1億3千万円の募金をお寄せいただきました。本当にありがとうございます。

他方、リスク研究センターの活動内容と組織については検討を重ね、国際リスク、金融リスク、社会経済リスクの3つの柱を立てて研究活動を開始することにいたしました。また、検討の過程で、シドニー大学の国際リスク研究センターと、ノースウェスタン大学ケロッグビジネススクールのリスク研究センターの活動が、私たちにとって最も参考となり連携をすすめるべき機関である事が分かりました。そこで本センター長である小田野教授に両センターを訪問してもらい、研究連携を進める作業を行ったわけです。おかげ様で、2月の設立記念シンポジウムの席上で、シドニー大学国際リスク研究センターとは、正式に研究連携に調印できました。また、ケロッグビジネススクールのリスク研究センターからも、今後協力を得られる見込みです。

リスク研究センター設立に多大のご協力をいただいた多くの皆様、とりわけ募金にご協力いただいた企業及び個人の皆様に心よりお礼申し上げ、センター設立の経緯の説明とさせていただきます。

平成16年度活動実績及び活動状況

- センター設立記念国際シンポジウム開催 (2月17日)
- 東北財経大学より干洋主席教授来学 (5月17日)
- シドニー大学国際リスク研究所副所長オキャラハン教授来日
学内セミナー実施・ワーキングペーパー作成... (6/19~7/3)
- 客員教授 幸田真音氏（作家） 経済学部講義・講演会
「ベンチャースピリットとリスクマインド」 (7月8日)
- 2004年度 招聘予定客員教授・学術研究会（詳細は4面に）

目 次

- | | | |
|--|-------|-----|
| ○リスク研究センター設立の経緯 | 北村裕明 | 1 |
| ○平成16年度活動実績および活動状況 | | 1 |
| ○リスク研究センターの設立に寄せて | 阿知羅隆雄 | 2 |
| ○リスク研究センターの活動と展望について | 小田野純丸 | 2-3 |
| ○シドニー大学国際リスク研究所長
ダリル・ジャービス博士の基調講演から | | 3 |
| ○トピックス | | 4 |

リスク研究センターの設立に寄せて

経済学部長・経済学研究科長

阿知羅 隆雄

創立80周年事業は、本年2月17日にその画竜点睛として設立された経済学部附属リスク研究センターをもって、成功裡に終えることができました。多くの方々の甚大なご協力に心より感謝申し上げます。センターが、昨年開設された社会科学系では我が国最初のリスクに関する博士課程、経済経営リスク専攻と連携し、社会科学系リスク研究の一大拠点なるべく、その発展につとめたいと考えています。

技術アセスメント、情報処理システム、統計学などの発展によりリスクの性格及びその影響を客観的に認識できるようになったこと、またリスクを正しく解析・評価し、適切な対応策をとることで持続可能な生活、経営、社会の構築がはじめて可能であるとの考え方へ、リスクに対する人々の見方・考え方が変化しつつあることなどが、リスク研究に対する関心を高めているといわれています。

商品世界では、その基礎である社会的分業が質的及び量的編制において自然発生的で偶然的であることが特徴的です。それ故、「不確実性」はこの世界に固有のものです。買い物手が見つかりしかも価値通りに販売されることは、商品にとって「命がけの飛躍」だといわれるのもこの自然発生性と偶然性に根柢があります。グローバル化時代とはそれが地球的規模で展開する

ことを意味しています。経営戦略策定の第一は「不確実性」の認識にあるといわれますが、現在、このことは、益々その重要性を増しています。また、久しく続く平成不況といわれる状況の下で、「勝ち組」・「負け組」の言葉でも表現されますように、競争の質が変わってきています。かつては諸企業が利潤の分配を巡って競争していましたが、いまでは損失を巡って競争するようになり、その損失を誰がどの程度引き受けるかは「力と智能の問題」となっています。このことからもリスク・マネジメントはその重要性を増しています。

ともあれ、商品世界に限らず、人間生活における「不確実性とリスク」に関する研究は、現代社会が逢着する時代の諸問題の考究であり、持続可能な生活、経営、社会の構築にとって避けて通れないものです。

新設のリスク研究センターは、外国の3大学、また国内では内閣府との研究協力及び共同研究を既に開始しています。センターのスタッフを中心にした問題提起的な研究活動とその先導のもとに、国立大学法人最大規模を誇る他の研究スタッフと、また国内外の研究者とも研究協力及び共同研究を進め、文字通りリスク研究をリードする一大研究拠点に発展させたいと考えています。

リスク研究センターの活動と展望について

リスク研究センター長・経済学部教授

小田野 純丸

今年2月17日に彦根プリンスホテルで開催された国際シンポジウムはリスク研究センターの実質的な開始を告げるものとなった。当日は滋賀大学関係者ばかりでなく多くの来賓がセンター開設を大いに祝ってくれた。センターは構想当初から国際性のある研究の中心拠点として第一線で存在が認められる活動をしたいという期待を込めて検討してきた。社会科学分野でリスク研究の先端を行く大学の研究拠点としては、シカゴ郊外にあるノースウェスタン大学ケロッグ経営大学院（ビジネススクールの国際ランキングでは常にトップグループに位置している）とシドニー大学国際リスク研究センターがある。前者は著名なジェーコブス学長を記念して創設されたゼル・リスク研究所を併設している。特に金融と財務に関わるリスク研究では最先端の水準と業績を残している。後者のシドニー大学はオーストラリアの最高峰にある大学で経済・ビジネス学部内に国際リスク研究センターを併設している。今日の経済問題を考える上で国際的側面を無視して戦略構想を論じることは無意味であるという視点から研究センターが活動している。

本学のリスク研究センターの開設にあたり両大学との連携を有する道が拓かれることはセンターの国際性構想にとって大きな後押しとなると考えられてきた。幸いなことに両大学の関係者は好意的に滋賀大学の構想と方針を理解してくれてさまざま形で支援を惜しまないという約束をしてくれた。シンポジウムではジェーコブス研究所長がセンター開設を記念してビデオ・メッセージによる祝辞を寄せてくれた。シドニー大学のジャービス研究所長はシンポジウムのゲスト・スピーカーとして来

彦され国際リスク研究の重要性がますます高まっていることを語ってくれた。同時に滋賀大学とシドニー大学のリスクセンター間での共同研究の合意文書に調印をしてくれ、これを起点として双方の共同活動が検討された。

滋賀のリスク研究センターはこのような設立経緯を背景に、三つの研究分野に焦点を当てて実質的な研究活動に乗り出している。一つは金融リスク研究である。派生商品として知られているようにオプションとかスワップとかという新しい金融ツールを組み入れた理論的・実証的研究の分野である。ほとんどの場合、高度な数理統計手法を駆使するアプローチが不可欠である。滋賀大学では気鋭の若手研究者を中心にこの分野で一つの研究拠点を形成しよう取り組んでいる。

第二の活動分野は社会経済リスク研究分野である。医療、環境、地方行政など多様な社会活動に不可分割に存在するリスクを研究対象として追求したいと構想している。また、滋賀の地は積極的にリスクを取り入れて日本中に名を馳せた近江商人発祥の地である。リスクとリターンというテーマの先鞭を切り開いた近江商人の思考や活動を解き明かすことは今日のリスク社会に生きる我々への有意義な教となりえるはずである。こうした史的アプローチも包含しながら社会経済リスク研究の拠点形成が期待されている。

第三の研究分野は国際リスク研究である。既にシドニー大学との間では海外直接投資問題に関する共同研究の具体化にむけた検討が始まっている。為替リスク、技術漏洩リスク、政治リスクなど多様なリスク要因が想定される。特にアジア太平洋

経済圏を重点に4、5年をかけた長期研究テーマが具体化されつつある。本年6月から7月にかけてシドニー大学国際リスクセンターの副所長オキャラハーン氏が滋賀大学のリスク研究センターに滞在し研究論文の発表とセミナーの開催を実現した。両校の緊密な関係は今後ますます深まっていくことを期待したい。

研究成果はたんに学内で埋没されることのないよう出版物や論文発表という形で公表していく計画である。学生向けのリスク理解と研究の意義を浸透させるための努力を通じて全般的にリスク研究と教育の普及に努めて行きたいと考えている。学外には公開セミナーやシンポジウムを定期的に開催しそうした活動を通じてリスク研究センターが開かれた存在であることをアピールしていきたいと考えている。幸いなことに、国内外からの多くの期待が寄せられる一方で学内の若手研究者を中心に積極的にリスクテーマへの取り組みが果敢に始められている。一つの展開は、内閣府経済社会総合研究所からの共同研究の提案である。国内経済的には産業の空洞化現象が指摘される一方で、多くの企業は雪崩現象的に海外投資に打って出ている。こうした現象に付随するリスク

要因を整理しながら企業の投資活動によって、例えば日中双方でどのような経済・産業上への影響が感知されるのかを実証的に追及するというのが研究の中心課題である。この提案は、滋賀大学の姉妹校である中国大連市にある東北財経大学を巻き込んで国際連携を形成しながら取り組む方向で調整が進められている。急速に発展する中国の一経済圏で日本企業の果たす役割が少しづつでも解明されることによって滋賀のリスク研究センターの評価が内外で高められることができればと考えている。

さまざまな好条件でスタートすることができた滋賀大学リスク研究センターは陸水会の支援なくしては実現し得なかっただし、今後の活動についても陸水会の叱咤激励と引き続く支援なくしては覚束ないことは明らかである。リスク研究課題について内外で認知される中心的センターを実現させていくためにこれからも末永く温かく御支援を是非お願いしたい次第である。リスク研究センターの日常的な活動はセンターのホームページを通じて閲覧可能にしてある。一度御高覧を頂けるようお願いする次第である。

シドニー大学国際リスク研究所長ダリル・ジャービス博士の基調講演から 2004年2月17日国際シンポジウム

オーストラリア国立大学の高名な学者であり世界銀行の顧問であるジョン・クィギン教授は21世紀にとってのリスクの問題はグローバル化が20世紀後半に果たしたものに匹敵すると喝破しております。その理解と意味するところは、リスクが私たちが社会や政治や経済問題について思考し、行動をするやり方を大きく左右することになると予想されるところにあります。このような見方を支える根拠を見つけ出すことは難しいことではありません。著名なノーベル賞受賞者から一般の市井の人たちまで、リスクの概念は多くの研究者や専門家を巻き込んで扱われ始めていることから想像されるようにその意識はますます広まってきております。リスク研究は政策と結びつくことが多く、意思決定に作用する可能性が高く、将来の予見し得ない出来事の可能性についても触れてはならず、リスク管理の要請に直結することからますます幅広い支持を集めています。

その結果、この20年間の間に、リスク分析は分析手法として幅広い応用分野に拡張されてまいりました。工学の分野では、リスク分析は安全の確保と有効な構造物の実現のための必要前提条件となっております。医学分野では、社会全体の衛生の向上を目指してリスクは公衆衛生の検査手法として用いられておりまます。・・・・・非常に多くの領域がリスク分析を用い始めている現状はこれまで見られなかったことでもあります。自然科学領域では、リスクはほぼ全ての分野であらゆる科学的検証法にたいして適用されております。太陽光線の人体への危害や隕石の地球衝突などと同じように、地震予知、材料耐性テスト、廃棄物処理にも用いられています。応用分野でも、リスクは航空工学や自動化機械、航空管制管理、食品安全と環境保全などの管理手法として中心的役割を果たしております。実際の政治の場でも、戦争や外交戦略のいずれでもリスクは不可欠の手段となっているのです。防衛計画やインフラの評価、国家経済安全保障、テロの対策、防衛隊員の保護など戦略的リスク管理の面でも中心的位置づけを与えられております。

それに反して、ビジネスや商取引の世界でのリスク分析の科学的応用については比較的後発であります。更に狭い範囲の分野に閉じ込められてきたこともあってリスク研究の応用が遅れてしまったのが実情です。銀行や保険企業では、リスクそのものは長い間資産・負債管理のために中心的手段として取り扱われてきました。顧客やプロジェクトの倒産リスクの確率評価や保険対象案件や自然現象に伴う賠償の確率などがその主テーマだったと思います。銀行や保険の領域では、どこまでリスクに立ち向かうかとか保障の評価の基軸、確率論に立脚した基盤のためにリスク管理を考えてきたわけです。そうすることで、提供する商品の価格設定や利益率の確定に資することができました。

それ以外のビジネス分野では、リスクはあまり高く評価されませんでしたし、リスクのシステムについての展開はまったく無かったといつても良いでしょう。企業経営の中で定式化して導入されそれをモニターするという組織だった扱いはあまりなかったように見受けられます。

製造業の場合、配送システムやサプライ・チェーン管理等の狭い範囲で活用されてきたかあるいはまったく無視されてきたかのいずれかであったようです。アグリビジネスの領域では、サプライ・チェーン管理や環境リスクはリスク分析ができると思われる程度では存在していたかもしれません。石油化学分野では、リスクがプラントに影響を与えるかどうかという視点から、操業の問題として、業務安全という見方から従業員の保護のためにリスクが取り入れられてきたといえるでしょう。リスク科学の適用は科学的試みの全分野に関わっておりますが、経営学の領域では部分的にだけ採用されているに過ぎません。・・・・・リスク研究の意義と重要性は以上のような概観からも理解されるのではないかと思います。

トピックス

○ 滋賀大学リスク研究センター設立記念国際シンポジウム開催

2月17日 彦根プリンスホテルにおいて、滋賀大学リスク研究センター設立記念国際シンポジウム「グローバル時代のリスク管理」が開催され、滋大と豪シドニー大の両リスクセンターが学術交流協定に調印した。続いて、NEC代表取締役 佐々木元氏、シドニー大学国際リスク研究所所長 グリル・ジャービス氏、毎日新聞社論説委員長 菊池哲郎氏、滋賀大学前副学長の小栗誠治氏の4氏の基調講演、さらに、討論が行われた。各氏の演題は次のとおり。佐々木元氏（グローバルな知の時代におけるリスクマネジメント）、グリル・ジャービス氏（国際リスクの存在と認識の重要性）、菊池哲郎氏（グローバル時代のアメリカリスク）、小栗誠治氏（金融リスクと中央銀行の役割）。

○ 干洋主席教授（東北財経大学学術委員会）来学



5月17日 東北財経大学より学術委員会主席教授であり、本学リスク研究センターの国際顧問会議メンバーである干洋教授（写真前列左から3人目）が来日、宮本前学長（写真前列右から3人目）の東北財経大学訪問に対して、本学を表敬訪問された。同行されたのは、東北財経大学国際交流所副所長 張語辞氏（写真後列右端）、同じく東北財経大学国際経済貿易学院教授（博士生導師）で現滋賀大学経済学部教授の劉昌黎氏（写真後列左から2人目）である。

○ オキキャラハン教授（シドニー大学国際リスク研究所副所長）が来日

6月19日～7月3日までの2週間、シドニー大学国際リスク研究所より副所長のオキキャラハン教授（写真右）が来日された。その間、リスク研究センターにて、ワーキングペーパー「グローバル化時代の企業評価」を作成され、セミナーを実施された。



○ 幸田真音氏 来学 講演及び討論会実施

今年度リスク研究センターの客員教授となられた作家の幸田真音先生が、7月8日来学され、講義の一環として「ベンチャースピリットとリスクマインド」と題して講演、続いて、北村裕明現副学長の司会で、伊藤忠商事代表取締役社長 丹羽宇一朗氏とディスカッションされた。

○ 研究会情報

本リスク研究センターでは、6月1日付けて、2004年度 次の客員教授をお迎えすることとした。早稲田大学教授西村吉正氏（元大蔵省銀行局長）、作家 幸田真音氏、名古屋市立大学教授 宮原孝夫氏、神戸大学教授 高尾厚氏。それぞれのご専門の立場からリスク研究センターにおいて、研究と教育にご貢献いただく予定である。すでに、7月7日には、宮原教授に「オプション価格理論モデル[GLP&MEMM]モデルについて」と題してセミナーを実施していただき、7月8日には、幸田真音氏に上記講演並びに討論をお願いした。幸田氏には、秋学期にも講演をお願いする予定である。

国立大学法人滋賀大学経済学部附属リスク研究センター

〒522-8522 滋賀県彦根市馬場1丁目1番1号 TEL: 0749-27-1404 内線396 FAX: 0749-27-1189

ウェブアドレス <http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/risk/index.html> メールアドレス risk@biwako.shiga-u.ac.jp